

第8回（令和6年度第1回）府中市生涯学習審議会会議録

1 日 時 令和6年4月26日（金）午後2時～4時

2 場 所 おもや4階 第1特別会議室

3 出席者（敬称略）

(1) 委員13名

池田和彦委員、市村忠司委員、上野和憲委員、江崎章子委員、榎本成子委員、
佐野洋委員、白信康委員、関川けい子委員、田頭隆徳委員、立石朝美委員、
長畑誠委員、中村洋子委員、福田豊委員

※今関紘二委員、渡邊和子委員 欠席

(2) 職員6名

佐藤文化スポーツ部長、平澤文化生涯学習課長、斎藤文化生涯学習課長補佐、
武居生涯学習係長、栗原主任、竹川事務職員

4 報告事項等

(1) 配布資料の確認

ア 資料1 第7回府中市生涯学習審議会会議録（案）

イ 資料2 令和6年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会交流大会・社会教育委員定期総会資料

ウ 資料3 令和6年度審議会日程（案）について

(2) 前回会議録の確認

各委員に校正を依頼した前回会議録（案）について、一部修正の上、市民に公開することが了承された。

(3) 令和6年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会定期総会について、参加した委員から報告があった。

5 審議事項

(1) 「これからの生涯学習を支える『公共』の役割について」

会長： 前々回の審議までの内容で中間答申を提出した。そして今年度はそれを受けてそこで話しきれなかった、生涯学習センターの今後のあるべき姿、移転等に向けて特にソフト面での提言をしていくことがこの審議会の後半の目標になる。

前回、私の方から「地域に根ざした学びのコミュニティというのをどう活性化するか」というテーマを出した。文化センターがそれぞれの地域の拠点、これは生涯学習・社会教育の拠点でももちろんある

が、市民の皆さんの活動の拠点でもあり、最近では地区社会福祉協議会の社会福祉の分野の拠点でもあり、文化センターの一つの圏域で色々やっ払いこうという動きになっている。これは全国的に見ても、地域に根ざした活動を盛んにしていこうということがあるので、我々としてもその地域に根ざした学びのコミュニティをどう活性化していったら良いかということについて、文化センターの役割を見直しながら、一体何が足りないのか、どうしたらいいのかということを考えるということで前回議論をした。

議論の結果は議事録にも書いてあるので、今後答申にも生かされていくと思う。今日の前半は、最後にもう一度その部分をグループに分け、2つのテーマについて話をしていきたい。

前回の話の中で出てきた1つの大きな論点が、実は文化センターの諸室はかなり使われていて、利用率は高いが、利用者の話を聞いたり、状況を見ると、高齢化が進んできているということであった。また、文化センターを拠点に活動している市民のグループもだんだん数が減ってきて、グループのメンバーが減って新しい人が入ってこないということであった。

つまり、メンバーが固定化して、高齢化が進んできているような状況があるのではないかという話が共有された。

文化センターが、その地域の拠点、生涯学習、学びのコミュニティの拠点としてこれからも役割を果たしていくために、今までほとんど利用してなかった人たちにどうやったら来てもらえるのだろうか、ということをして1つ今日の論点として皆さんと話をしていきたい。これをグループディスカッションのうちの1つ目のテーマとしたい。

今まで来られていない人たち、あえて言うならばより若い人たちかもしれない、障害者もそうかもしれない、もちろん若い人といえぱ子供も入るかもしれない。また、外国籍の人とか様々な人たちがいると思うので今までその地域の中に暮らしているが、「文化センターとの繋がりがなかった人たちにいろいろな形で来て学んでもらうためにはどうしたらいいのだろうか」ということが、1点目。

もう1点目は、文化センターの果たすべき役割の中の一つとして、地域のコミュニティの活性化、地域の課題の解決に繋がる学びを得られる場となる必要もあるのではないかということで、「文化センターが地域のコミュニティの活性化や課題解決に繋がるような学びの場になるためには、何が必要か」ということをテーマとしたい。これは実は前期の審議会でも話が出て提言もしたことで、国レベルでも色々な形で言われてることだが、地域がその地域課題の解決にもっと主体的に動き出す必要があるのではないかということである。

本日の前半はそれぞれのテーマごとにグループに分かれて話をして

いただく。副会長がファシリテートする側は、1つ目の、「今まで文化センターにあまり来ていない方、若い世代に限らず色々な人たちに文化センターを使ってもらって活動を活発にしていくにはどうしたらいいだろうか」ということを考えていただく。

もう1つのグループは、私がファシリテートするが、2つ目の、「地域の課題の解決や地域コミュニティの活性化のためには、文化センターは、どのような役割を果たすのか、どんなことをしたらそれがより促進されるだろうか」ということについて、意見を出し合っていた。

それぞれグループの中で付箋もあるので、今話したテーマについて皆さんの考えを書いてもらったり、書いたものを貼ったりというような形でブレインストーミング的にまず意見を出してほしい。

今回はまず文化センターについて、地域の拠点として何ができるか意見を出してお互いに共有をする。本来の我々の目的の生涯学習センターという府中市全体の拠点の役割を考えるべきなので、文化センターがそうなるためには、生涯学習センターとしては何をすべきなのかということをお互いと一緒に、もう一段階上の話を少ししたい。

《グループディスカッション》

テーマ1 「若い人や今まで来られていない人に来てもらうようにするにはどうしたらよいか」

《付箋で出された意見》

- ・ 地域不要品リサイクル
- ・ カフェ、だれでも食堂
- ・ バザーをしてはどうか？
- ・ 幅広い世代で利用経験を作る。例えば自転車の乗り方？
- ・ 小さな畑を設けて草取り、食物を育ててみんなで食べる
- ・ 定年後のコミュニティ、憩い、活動の場
- ・ おもちゃの修理
- ・ 野菜を育てる
- ・ 広場、はらっぱ
- ・ 宿題の手伝い
- ・ 書道
- ・ 共同生活の場 能動的に使用する、生活感のある場所
- ・ 子供たちに来てもらうイベントを行う→会議しかしていない
- ・ 通期でも学べる子どもの場所 サードプレイス

- ・冬休みの書初め、習字
- ・発表会の練習などで使ってもらう
- ・保育園の子に絵本を借りてきてもらう
- ・夏休みの宿題
- ・自転車の乗り方を教える安全教室
- ・学童での利用
- ・情報の発信をすべき（何をしているのか？）
- ・相談窓口を作る
- ・場所の機能を変える。
- ・学習Gが個別に使うところから、地域に開かれたところ（通年・スポット）
- ・文化センターの名前を変える

テーマ2：「地域のコミュニティの活性化や課題解決をする学びの場にするにはどうしたらよいか。」

《付箋で出された意見》

【現状の問題点】

- ・文化センター主催の「まつり」子どもとお年寄り対象が多い
- ・事業はいろいろあるが講座が少ない
- ・目的のある集まりにしか行けない
（ブラブラできない、おしゃべりできない、ちょっと集まれない）
- ・何かをやっているけどドアを閉めてしまって、ハードルが高いのでは？
- ・使用している人が決まっていて部屋が取りにくい
- ・子ども向け親子向け季節ごとの事業が多い
- ・文化センター主催の行事は「協力を求められる側」が渋々
- ・文化センターのPRが少ない
- ・文化センター講座への呼びかけがない、少ない
- ・同じ地域の知らない人と顔見知りになることが少ない
- ・じゃあ文化センターでやるか、話し合うか、とならない
（つまりそういう場所ではない）

【調査・分析】

- ・まずは文化センターとしての活動の全体像を把握する必要がある
（イベント等を含む）
- ・各文化センターにはコミュニティ協議会が設置されている。そのコミ協の活動の実態を調査する必要がある。
- ・それぞれの文化センターの課題を洗い出しては？
- ・文化センターを使用している人達はずっとそのままなので最初から見直してみてもいい。

- ・ したら文化センターへの興味がわくのかまじめに考える。

【自治会やNPOなどと】

- ・ 府中のコミュニティ活動の中心は、自治会・町会である。その活性化を使命としている府中市自治会連合会（自治連）との連携が不可欠
- ・ コミュニティの役割を強化するためには「アソシエーション」（NPOなどの非営利的）との連携・ネットワーク化が必要
- ・ 多くの自治会・町会の課題は会員数の減少と高齢化である。それにどう対応するかを考える必要がある。
- ・ 「自治会・町会に入るメリットは何か？」にきちんと答えられる必要がある。
- ・ 地域の課題解決を…誰が取りまとめるのかがハッキリしない

【提案】

- ・ 中学生、高校生の活躍、発表の場
- ・ 地域の困りごとに関するワークショップや講座
- ・ デジタルな場も
- ・ 着付け教室
- ・ 料理教室（家庭料理）
- ・ 料理教室（簡単な男の昼食料理、そば打ち教室）
- ・ 開かれた文化センター（フリースペース、誰でも使える開放PC・コピー機）
- ・ お茶、コーヒーのおいしい飲み方
- ・ 囲碁・将棋、マージャン教室
- ・ ワイン試食会
- ・ 野外ツアー（植物、自然、遺跡）
- ・ 和太鼓教室
- ・ カラオケ教室
- ・ 演芸、落語鑑賞会
- ・ 水彩画、デッサン、クレヨン、色鉛筆教室
- ・ デジタル・シチズンシップの学習が大切
- ・ コミュニティカフェを開く
- ・ コミュニティの在り方は近い将来根本的に変化するだろう。「デジタルつながり」を導入しなければ、自治会・町会は成り立たなくなりそうだ。
- ・ 文化センターでの文化祭とかは出演者が少なくて見に来てくれる方も少ないので、マジックとかミニ歌謡ショーを取り入れてもいいのでは。

会長： では最初のテーマから共有をお願いしたい。

副会長： 現段階でのまとめとしては、場所としての機能を考え直すのが良いのではないかと。現在の場所としての機能は、個別学習グループが学習の場として使っているということがあるが、それをもっと機能を変えてオープンにするのが良いという意見である。各世代でい

ろいろな人が集まれるようにするために、もう少しその制約を外して、極端なことを言うと寝泊りするのには困るけれど、それ以外のことであれば、共同生活の場として、名前がいいかどうかはわからないが、そのように文化センターを位置づける。

例えば、誰でも食堂がある。作りたい人が来て作れば、食べたい人が来て食べる。格差がどんどん広がっているのに、無料で食べられるならいきましょうという人だっているかもしれない。

それから、学習成果を発表する場として年に一度計画された場で実施する文化センターまつりのようなものではなくて、普段から、例えば書が上手なのであれば、子どもたちのために書道を教えてあげるとか、宿題をやってあげるとかということがあると良い。

また、無機質な草も生えてない広場ではなくて、野菜などを作れるようにして、作りたい人がやってきて作ればよく、それを観察したい小学生は来て観察して、という、各世代が何らかの動機を持って集まって来ることができるような場に変えていく。名前も文化センターではなく、変えた方がいいのではないかという意見も出た。

これはちょっと個人的な意見だが、人口が減り始めて13年、だんだん縮退していることを考えると、協働の場としての文化センターがあり、そこにはいろいろな動機に基づいて参加できる仕組みがあって、各地域の人たちがそれぞれの動機のもとに集まってくることができるというようなものが理想的な形だと思う。

そうすれば必然的に若い人も中に入ってくることができるだろうというようなことで議論をした。

会長： 何か補足したい点はあるか。

委員： 学童を取り込もうという意見も出た。また、先ほどの習字の件だと、書初めの宿題が出ると家で新聞を広げてやるが、墨がこぼれるのが心配だったりする。文化センターに習字の先生がいて、何日に集まろう、書初めをみんなでやろう、と言ったら、親はもう喜び勇んで送り出す。夏休みの宿題のネタに困っていたり、冬休みの習字をやったりなど、そういうスポットでもいいから、その場で体験するというのを子どものうちに経験すれば、今以上に府中市民の若い人にとって当たり前の場所になるのではと思う。

委員： 先ほどの説明について質問したい。「きょうどう」という言葉が出たが、コモンの共同か、コラボレーションの協働か。

副会長： 私はともに働くという意味の「協働」が良いと思っている。

会長： もう1つのテーマについては、地域コミュニティの活性化や地域課題の取組を促すような文化センターのあり方は何かという話だが、現状の問題点としてやはり今の文化センターは開かれていないのではないかという話がたくさん出た。目的のある集まりにしか人が行かない、ドアが閉まっていて何をやってるかわからないなど。あとは、子ども向けや親子向け、季節ごとの事業など、本当に限られた人たちのためのものになっているし、逆に言うとふらっと行って何かそこで、というようなことができないという問題があるのではないか、というところはもう1つのテーマとも共通していると思う。

提案として出てきたのが、フリースペースで誰でも使えるような場所にした方が良いという意見。コミュニティカフェ的なものがあつたらもっと人が集まっていくのではないか。あとは、若い人たちのことを考えると、デジタルでの繋がりや文化センターでの対面の繋がりをうまく組み合わせるような形が必要ではないか、という話も出た。

そして地域コミュニティや地域課題ということでは、それぞれの地域の自治会・町会が抱える課題の解決や、何かみんなで話し合いをするなど、そういうものをしっかり文化センターで受け止めてやっていく。そういった連携や、自治会以外にもNPO的に活動している人たちなどともうまく繋がって、文化センターで活動していくということもあって良いという話だった。

そもそも今文化センターはどんな問題を抱えているのか、各文化センターにはコミュニティ協議会（コミ協）があるので、そことうまく連携を深めていく必要があるのではないかという話もあった。あとはもっと現状をしっかりと分析する必要があるという提案もあった。

その他色々と具体的な講座も出てきたが、大体はそのような感じであった。

今回の審議会の主たる目的は、生涯学習センターのあり方なので、文化センターがこうあってほしいということだけでなく、それを見据えた上で生涯学習センターは何ができるだろうかということを最終的には提言にしていきたい。

そうなったときに今2つのグループで出てきたことから考えて、生涯学習センターは何ができるんだろうか、ということについてのご意見があった。

先ほどのデジタルの話で、これから必要になってくるデジタル・シチズンシップの学習は、府中市民全体にとって必要なもので、生涯学習センターでやってもらって構わないということで、そういったことを行う人材を育成するためのために必要なことを生涯学習センターが担うというのはあると思う。

地域の課題解決とかに今後必要な人材を生涯学習センターが育成し

ていくという、これは府中市全体の課題なのでそういう方向性はあると私も思う。

委員： 学習センターが、各文化センターをコントロールして、集中的に何かを見回していった方がいい。今文化センターが主体で、学習センターとは繋がってないのかと思う。文化センターは使うが、学習センターはこの前見学したが、ああいう立派な施設もあるっていうのを知らないのもあると思う。文化センターの上に学習センターがあるというのを明確にしておいた方がいいと思う。

会長： 学習センターは全体をコーディネートするような機能をやっても良いのではないかということ。

調査をもっとした方が良いのではなかという提案があって、コミ協の活動の実態の調査とか、各文化センターの課題は何なのかとか、どうしたら文化センターに興味湧くのか、そういう調査をするとなったときには、これは生涯学習センターが府中市全体について何かやってもらうことはあるのかもしれない。生涯学習センターが各文化センターにおける生涯学習活動についても目を配ってその状況を把握しておく必要があるということを府中市として考えるのであれば、生涯学習センターが上を担う団体として調査するという事は不可能ではないかかもしれないと思う。

1つ目は人材育成の機能があるのではないか。2つ目はそういう各文化センターでの生涯学習活動についてモニタリングする機能がないかという話だ。

副会長： こちら側で出た意見で、私が言ったが、「つくられた文化センター」というよりも地域の人たちが「自分たちでつくる文化センター」にしていきたい。そこでは硬い土を掘り返して、畑にしてもいいと、そのぐらいの緩い制限で使わせた方がいいと。そのときに生涯学習センターが各文化センターでいろいろな取り組みをサポートする。つまりそのモニタリングも良いが、モニタリングをして指導をするというのではなく、好き勝手やってもいいけれど、ここまではやったら駄目というようなことを見守るというか時々見回りに来るというぐらいで良いのではないか。

あるいはすごく活動的な文化センターができたときに、そのぐらいで止めておいて、というようなことを言いに行く。問題になりそうなおことがおきたら、生涯学習センターがサポートしたり助言したりするのが良いというようなことも良いのではないか。

制度的なもので押し付けようとするのではなくて、ある程度自由度

を持たせるような機能にしておいて、それを全体として整合性を取らせるような組織として生涯学習センターがあっても良いのではないか。

委員： 今はそうなっていないのか。

副会長： そうではない。こちらのグループでの議論は、各学習グループが自分の活動のために使っているというだけで、地域に開かれていないというそちらの意見と同じで、地域に開くときに制約を外して開いた方が良いのではないかということ。どこまで開くかというのは色々あると思うが、ここまですぐ良くてここまですぐ悪いというのはなかなかわからないので、自由にやらせてもらって、やりすぎそうなことがあったら生涯学習センターの人が来て、相談にのったり支援したりするのが良いのではないか。

委員： 上からコントロールするという発想はあまり好きではない。各地域が自由に活動できる拠点として文化センターは欲しいと思う。羽目を外したらどうしようという話だが、これは多分心配しなくても、各文化センター間での連携や、所長は市の職員なので、ちゃんとコントロールが利くかと感じている。

委員： 生涯学習センターの役割としてチェック機能を持つのはあまり良くないと思う。生涯学習の一番上にあるということであれば、例えば、府中市民として何かトップダウンで、なるべく裾野を広く、共通認識を持ってもらいたい事柄に関してはネット配信して、各文化センターで学習ができるなど、そういうような形での共有化を図る分には良いと思う。地域が活性化してるところに何かしに行くのはどうかという気がする。

それともう一つ、文化センターそのものは外に向かって発信することが非常に少ない。市の広報の中で、「この日、この文化センターで、何をやる」と1行でしか書かれていない。それが、府中市が1日と15日に広報紙を出す中でちょっと書かれてあるだけなので、発信力は基本的に弱い。地元で行うのであれば、地元の掲示板なりなんなりを活用しながら、そういうような古いパターンのやり方もあるのではないかと思う。

やはり文化センターに行って、「何を何曜日やってます。メンバーを募集してます」という貼り紙を見ないと一般的にはわからないと思った方がいい。広報があってもみんなが隅々まで見ることは多分あり得ないと思う。やはりもう少し地元根付いた手法でできることをや

ったら良いかと思う。

ただ、文化センターの3人ぐらいの職員が掲示板にチラシを貼りまくるなんてことはおそらく期待できないので、何かもう少し自分たちで広報できるものがないと来てくれる人はいない、開かれてはいかないかなという気がする。

会長： 場所として開いていくためにまだ色々やれることはあると思うが、確かに広報も大事だと思う。そういうことを誰が担うのかということになると、多分生涯学習センターの中に、その地域の学びのコミュニティを促進する役割を担う人が1人でもいれば、つまりそれは生涯学習センターで自分が座っているだけじゃなくて、足しげく文化センターに通って、面白い事例があればみんなに紹介したり、困った人がいれば補助したりなど、そういう人がいてもいいのかなとは私も思う。

府中市民全体に対して必要な人材育成機能はもちろん生涯学習センターであるし、今委員が言ったように全員が知っていた方がいいような話は講座で配信することもできる。また、コーディネーション機能もできると思う。どちらにしても今生涯学習センターが生涯学習センターで閉じているので、生涯学習センターがちゃんと文化センターに向かって開かれていて、常に繋がっているという仕組みを作るということは、今の市のその制度の中で可能な限りだとは思いますが、何らかの形で提言しても良いと思う。

一旦ここで文化センター関係の話は切ることとする。

ただ、もう一度最後に審議会の答申を作るときにはこの話をちゃんと答申の中に盛り込むので、その段階でまたいろいろと皆さんと最終的な確認をし、付け足すことや、これは無理だという話などができると思っている。それまでに何か新しいことがあればまた言っていただければいいと思う。

それでは、次は全体で話していく。

今までは地域に根ざした学びのコミュニティをどう活性化していくかという、文化センターを特に取り上げて、そこから生涯学習センターについて考えた。

次のテーマは地域ではなく、色々なテーマごと、課題ごとの学びのコミュニティについて、様々なサークル活動、NPO的な活動もそうだが、そういう学びのコミュニティをどうやって活性化するのか、そこにおける生涯学習センターの役割はどうあるべきかという話をしていきたい。多様な施設、他の色々な市の施設との連携、協働それから今既にある生涯学習ファシリテーターやサポーターの人たちの活用なども含めて、テーマごと、課題ごとの学びのコミュニティをどう活性化するかということについて話をしていきたい。

その前に、この審議会は、それぞれの分野で色々な経験を積んで活動をされ、お仕事もされてきた委員が集まっていて、「学び」ということに関して経験や考えを持っているので、話したいことがある。

今まで我々はずっと「学び」という言葉を使っていて、府中市の場合は「学び返し」という言葉の中にも「学び」という言葉が入っている。しかし、もしかしたら1人1人その「学び」というものについてイメージが違うのかもしれない。社会教育という言葉の中には「教育」という言葉が入ってるが、生涯学習には「学習」という言葉が入っている。

少なくとも「学び」というのは、生涯学習センターで色々やっている講座、特に教室に座って先生から話を聞くような講座だけではないと思う。もっと広く「学び」を捉えた方が、「学び」のコミュニティの活性化を考えていくときには、いいのではないかと思い、副会長と事務局とも相談した。なので、残りの時間を使って皆で自由に「学び」ということについて話していきたい。

1 番の質問。「何から、どうやって学ぶか」

先生から教室で話を聞いて学ぶというのも一つの学び方だが、そうではない学びもたくさんあると思うのでそれをたくさん挙げてほしい。

2 番「誰と学ぶか」

1人で学ぶというのももちろんあるが、1人じゃないかもしれない。

3 番「いつどこで学ぶのか」

「いつ」というのは、朝や夜ではなくて、例えばどの年代で、ということ。若いとき、それから少し若くなくなったとき、それからかなり若くなくなったときとか、もう若くないときなど。

「どこで」というのもこれも実は大事で、先ほども言ったが、教室の学びだけではないと思うので、どういう「学び」があるのかということ。

そして最後に「何のために学ぶのか」

最後は哲学的になるかもしれないが挙げてみたい。

ということで、委員皆さんの自身の経験を振り返っていただき、自分はこんなときにこのように学んだというようなことを、思いついたものがあったら付箋に書いてほしい。

できるだけ色々な多様な「学び」を皆さんと共有したいので、皆さんのご経験の中でぜひ出していただきたい。

委員： 現在の教育制度の中での「学び」は出すのか。

会長： 入れてもいいが、つまらないかもしれない。今の学校も場合によっては色々やっているから何かあれば。

《付箋で出された意見》

① 「何からどうやって学ぶのか」

- ・ W e b 学習
- ・ 書籍（入門書…新書）
- ・ インターネットでの検索
- ・ 生成 A I に教えてもらう
- ・ 図書館の司書の方のアドバイス
- ・ まずは体験
- ・ ツールを購入する
- ・ 自分や他人の経験から
- ・ 講座に参加
- ・ 旅先で
- ・ 講演会に参加
- ・ イベントから
- ・ 人の話
- ・ 人と話して
- ・ 習い事を通して
- ・ 新聞、T V など
- ・ 本から
- ・ 実際にやってみる
- ・ 多分何からでも。ヒント、発想があれば「学び」かも
- ・ 子供の活動を通して
- ・ テレビからマジックを学んだ
- ・ 人からマネして学ぶ
- ・ 人からマネの仕方を学んで学ぶ
- ・ S N S から
- ・ 対話して
- ・ ボランティア活動を通して
- ・ P C を駆使した水彩画
- ・ お釈迦様のお教えを学ぶ
- ・ 踊り→会社にいるとき（愛好会として入る）
- ・ 市販のテキスト
- ・ インターネット
- ・ パソコン仲間と勉強会
- ・ 水彩画（チラシで）

② 「誰と学ぶのか」

- ・ 同世代と
- ・ 多世代
- ・ 友達からゲームを学んだ
- ・ 1人で
- ・ 同じ興味関心の人と
- ・ 自分と全く違う人と
- ・ 学ぶのは能動的な作業で、深さもレベルもペースもあり、多くは「1人」。
たまたま周りに人がいただけ？
- ・ 共通の話題を持っている人
- ・ 1人
- ・ サークルを探す。
- ・ 合唱団体の先生から声楽を学んだ（ウィーン少年合唱団）
- ・ 同じ水準の人と学ぶ、上の水準の人から学ぶ、下の水準の人に学ばせる
- ・ SGC講座の卒業グループ
- ・ 個人→現6名くらい
- ・ 仏教学者と
- ・ 会の人達

③ 「いつどこで学ぶのか」

- ・ 子育て期 区役所
- ・ 仕事をやめたとき
- ・ 新しいことを始めたとき
- ・ 子供の学校のPTAで
- ・ 仕事をしながら大学で
- ・ 異文化、異世界で
- ・ 大学
- ・ 企業
- ・ 他学部
- ・ 大学院
- ・ 研究所
- ・ 団体
- ・ 行政
- ・ 社会
- ・ 地域
- ・ 海外
- ・ 親が子供の計画を立てる
- ・ 必要と思ったときに随時

- ・いつでも 自宅ないし図書館
- ・できないことができるようになるときに学ぶ
- ・できたことができなくなるときに学ぶ
- ・いつでも(人生は学び)
- ・月例会
- ・室内
- ・野外
- ・発表会
- ・家の近く
- ・毎月例会での教室
- ・お寺巡り
- ・30代(会社と外)
- ・中学生の頃 13歳

④ 「何のため学ぶのか」

- ・今、自分の中の課題を解決するために
- ・資格を取るため
- ・趣味の充実のため
- ・検証
- ・興味
- ・理論武装
- ・仕方なく
- ・競争
- ・知識欲
- ・趣味
- ・問題解決
- ・自己啓発
- ・自己実現
- ・スキルアップ(語学、趣味含む)
- ・コミュニケーション促進
- ・支援のため
- ・スキルアップ
- ・自分の興味・関心
- ・集団生活を維持するために学ぶ
- ・新しい知識を得る
- ・知識の更新
- ・楽しいから
- ・知りたい、考えたい
- ・人生の回顧

- ・若いときからやりたかったこと
- ・終活のため
- ・自分のため

会長： これは正解がある話ではないし、ここで正解を出す必要もない。大事なのは、我々がどのように「学び」を捉えているのか。そしてそれがいかに色々あるのかということを確認できればいいと思う。それを次の話し合いに繋げていきたい。

我々がこれから「学びのコミュニティ」と言ったときの「学び」というのはこういう「学び」だ、こういうものも「学び」だ、こういうやり方でも良いのではないかと、色々なものに繋がるように、と思っている。

ここで副会長からコメントをもらいたい。

副会長： いろいろな「学び」があるということがわかった。

大学でデータサイエンスをやっている中で学んだことだが、私達はお母さんのお腹の中にいるときから学んでいる。それは言葉の音を学んでいる。どんな音が聞こえるのかというのをまず学び、10歳ぐらいで耳が悪くなるらしい。10歳ぐらいというのはちょうど母語の音が完成するときと言われている。

脳自身はいつも学んでいるということは色々な記事にあるとおりだが、結構時間がかかるらしい。身体的に学ぶこともそれから知識として得ることもそうだが、言葉にならない「学び」と言葉に表現できる「学び」があると言われている。身体系の技能的な学びを集団でするにしても、個人でするにしても、説明できない「学び」を学んでいくのと、説明できていることを学んでいくというのがあるそうだ。これは多様だと思う。

できないことができるようになるのを学ぶ、ということが基本だと思うが、長寿の時代になったので、できたことができなくなるときにも学ばないといけない。ちゃんとオムツの替え方などを学ばないとならない、そういう時代になっていて、意見にも出ていたようにとにかく生きている限り学んでいかないと人生終われないという時代になったなと、つくづく思った。

会長： まとめる必要はないが、とにかく多様な「学び」があるんだということは確認ができる。そしてそれは生涯学習センターで今行われている学習活動あるいは文化センターで行われている様々なサークル活動がもちろんこの中にたくさん入ってくるが、それではないものもあるのではないかと思います。

つまり今、私達が普段話し合いの中で取り上げている生涯学習センターでの様々な活動や事業、それから文化センターで行われていること、あるいはサークル活動だけではないところに「学び」は広がっているかもしれない。

私達の様々な暮らしの中で、日々あるいは人生の様々な節目で、という意味で「学び」をもう少し広く捉えてもいいのではないかということが言えると思う。

ということで、これから先どうするかということだが、1回整理して皆さんにもう一度提示したい。それを共通の出発点にしながら、いわゆる地域にこだわるのではなく、課題、様々な興味関心、そうしたものに集まってくる「学び」のコミュニティというものをどうやって活性化していくかということについて、次回以降話をしていきたい。

6 その他

- (1) 次回の審議会の開催時期について、令和6年6月18日（火）の午後2時から府中駅北第2庁舎3階会議室にて開催することで、了承を得た。また、東京都市町村社会教育委員連絡協議会第5ブロック研修会は11月16日（土）ルミエール府中にて実施することを予定しているため、社会教育委員の協力を依頼した。